

## 質的研究における対話的モデル構成法

—— 多重の現実, ナラティブ・テキスト, 対話的省察性 リフレクシヴィティ

やまだようこ 京都大学大学院教育学研究科  
Yoko Yamada Graduate School of Education, Kyoto University

### 要約

質的研究の新たな方法論として「質的研究の対話的モデル構成法 (MDMC)」を提案し、その前提となる理論的枠組モデルを構成し、次の3つの観点から考察した。1) 多重の現実世界と対話的モデル構成：現実世界は一つではなく、多重の複数世界からなり、研究目的によってどのような世界にアプローチするかが異なる。対話的モデル構成がアプローチする世界は、「可能的経験世界」と位置づけられる。他の「実在的经验世界」「可能的超越論世界」「現実的超越論世界」との対話的相互作用が必要である。2) 多重のナラティブのあいだを往還する対話：ナラティブ研究者がアプローチする現場とナラティブの質の差異も多重化すべきである。そこでナラティブの現場を「実在レベル：当事者の人生の現場」「相互行為レベル：当事者と研究者の相互行為の現場」「テキスト・レベル：研究者によるテキスト行為の現場」「モデル・レベル：研究者によるモデル構成の現場」に分けて、それらに対話的に往還する図式モデルを構成した。3) 「ナラティブ・テキスト」と「対話的省察性」概念：対話的モデル構成において根幹となる二つの概念について、研究者がテキストと対話的に「語る」「読む」「書く」「省察する」行為と関連づけて考察した。テキストは、文脈のなかに埋め込まれていながら、相対的に文脈から「はなれる」(脱文脈化・距離化) ことによって、新しい「むすび」をつくり、物語の生成を可能にする。

### キーワード

ナラティブ, 対話, 可能世界, テキスト, 省察性

### Title

**A Methodology of Dialogic Model Construction for Qualitative Studies: Multiple Realities, Narrative Text, and Dialogic Reflexivity.**

### Abstract

A Methodology of Dialogic Model Construction for qualitative studies (MDMC) is proposed and discussed with respect to the following three issues. 1) Dialogue among multiple realities: There appear to be multiple worlds and realities connected to research for different purposes. The purpose of MDMC is to construct the realities of possible, assumed worlds that are related to the actuality of experience. 2) Dialogue among multiple narratives: Narrative researchers need dialogic interactions with various levels of narrative. The first level consists of the facts of life events and experiences. The second level lies in the mutual act of telling stories that takes place among narrators and listeners. The third level is the narrative text and the construction of models. The fourth level consists of the ties between narratives and academic or practical issues. 3) Concepts of "narrative text" and "dialogic reflexivity": These concepts are important for the relative de-contextualization and generative re-connection in the narrating, reading, reflecting, and writing processes of researchers.

### Key words

narrative, dialogue, possible world, text, reflexivity

質的心理学は、単にデータ抽出方法や分析方法をさすのではなく、経験世界をどのようなものと見るか、そこへどのようにアプローチするかという、世界に対するものの見方と方法論の変革にかかわっている。それを考えるには、ナラティブ（narrative、語り・物語）研究が中核となるだろう。現代の質的研究には、ナラティブ・ターン（物語的転回）が連動しているからである。ナラティブ・ターンとは、1990年代からおこり21世紀になって急速に発展している認識論や方法論の転換であり、社会科学、人文科学、自然科学を含む学横断的な大きな潮流のことをいう（Denzin & Lincoln, 2003；やまだ, 2006b）。

ナラティブとは、「広義の言語によって語る行為と語られたもの」をさす。広義の言語には、身体や表情による非言語的語り、イメージや絵画や音楽や映画など視聴覚的語り、都市や風景など文化表象や社会的表象なども含まれる。

ナラティブ研究には、多様な理論的立場が共存しているが、おおまかにいえば語り手と聞き手の相互行為の文脈において、経験の組織化のされ方、物語の語り方とプロセス、現実の多様性を認め多種の意味づけを重視するところに特徴があるといえよう。（Clandinin & Connelly, 2000；Daiute & Lightfoot, 2004；Holstein & Gubrium, 1995/2004；McAdams etc. 2001, など）。

ナラティブ研究では、「研究者」自身もニュートラルな傍観者的存在ではありえないので、研究者自身の立場、現実世界の見方、アプローチ方法などが、研究の一環として問われる。各研究者が自分自身の立ち位置を明確にし、主要な論点（issues）は何であり、何を問題にする研究か、どのような方法論によってアプローチするかを明確にする必要がある。

筆者の立場は、「モデル構成的現場心理学」である（やまだ, 1986；1987）。これは、グラウンデッドセオリー（Grazer & Strauss, 1967/1996；以下 GT と省略）や KJ 法（川喜田, 1967）とは独立に生み出された方法論だが、GT や KJ 法と同様に、現場からボトムアップでモデルを生成するプロセスを重視するものであった。しかし、実際に研究を積み重ねていくと、次の点が明らかになってきた（やまだ, 2002；2006a；2006b）。

1) モデル構成には、<sup>フィールド</sup>現場の質的データからのボト

ムアップ、つまり現場から理論への帰納的なプロセスだけではなく、理論や仮説からのトップダウン、つまり理論から現場への演繹的なプロセスが重要で、その二つのプロセスの対話的往還が必要である。2) 現場とモデルの往還だけではなく、抽象度の異なる多種のレベルのモデル化が必要である。たとえば語り事例や個別事例も一種の「モデル」として考えられる。事例モデル、半具象的モデル、枠組モデルなど、複数のモデルを多重化させて、それらのあいだの対話的往還が必要である。3) 研究者は、現場において多種の対話を交わす主体であり、研究者自身を、データ収集プロセスだけではなく、モデル構成プロセスのなかにどのように組み込むかを明確にしなければならない。4) 構成されたモデルは、単に研究者自身の個人的な体験をまとめた「私語り」「旅日記」であってはならない。モデルはその学問の論点や既存の知見と対話的にむすびつけて、学問体系のなかに位置づけて語られねばならない。5) 研究者の研究論文も、ひとつのナラティブとみなすことができる。それは最終プロダクトとしての作品ではない。研究の基になった「語りテキスト」や「論文テキスト」をある程度公共化して、研究者自身あるいは他者による「省察」と「語り直し」をしていくことが必要である。

このような観点に加えて、さらにナラティブ論の基本的考え方をモデル構成のプロセスに積極的に生かす方法がないかと考え、方法論の検討を進めてきた。そこで、「モデル構成的現場心理学」を<sup>モデル</sup>発展させて、「質的研究の対話的モデル構成法」（Methodology of Dialogic Model Construction for qualitative studies = MDMC）という名前に変更することにした。本論ではまだデッサンにすぎないが、この方法論の基礎概念を明確にすると共に、ほかのナラティブ研究にも役立つために、次の3つの観点から、理論的フレーム・モデルの提供を試みる。

- I 多重の現実世界と対話的モデル構成
- II 多重のナラティブのあいだを往還する対話
- III ナラティブ・テキストと対話的省察性

本論では、上記3つの観点から「質的研究の対話的モデル構成」の理論的フレーム・モデルをつくることを目的にする。ここでは、モデル構成プロセスの具体的方法を提示するのではなく、対話的モデル構成の位

置を明確にするための理論的枠組の提示を行うのである。そのなかでも特に、モデル構成の前提となる「ナラティブ・テキスト」概念に焦点をあてて考察する。

## I 多重の現実世界と対話的モデル構成

### 1 現実の何を問題にするか

科学というものは、一番昔の素朴实在論に帰ったところから出発したのである。人間が一人も生きていなくても、ものは自然界にそのままにあるという形をとって、今日の科学は進歩したのである。しかし、ものは自然界にそのままにあるというのは、一種のごまかしであって、この問題はそう簡単にはいえないのである。

科学の世界では、よく自然現象とか、自然の実際の姿とか、あるいはその間の法則とかいう言葉が使われるが、これらはすべて人間が見つけるのであって、その点が重要なことである。それは、科学の眼を通じて見た自然の実態であり、科学の思考方式を通じて自然を認識し、その上に立つて、科学がつくりあげられているのである。

それで現在の科学の思考形式以外の見方で自然を見れば、その見方で見た、また別の自然の実態というものが見えるはずである。それが現在の科学が捉えている自然の実態とひどくちがっていても、ちっともおかしくはないのである（中谷, 1958, pp.19-22, やまだ要約）。

「世界」はそこにあるという観念を疑い、われわれが世界とみなしているものはその世界自体がある種の記号体系で語られているという観念をとるならば、そのとき学問のかたちは根本的に変わる。そうなれば、現実世界がとりうる無数の形態—科学によって生み出される諸実在をも含めて—を扱える立場に、われわれは立つのである。（Bruner, 1986/1998, p.170, やまだによる訳語改訂）

最初に、対話的モデル構成がアプローチする「現実 (reality)」とは何か、どのような世界を問うのかを問題にしてみたい。すでにナラティブ研究では、現実世界を記述する用語を慎重に区別して、事実 (fact) や

現実 (reality) を、真実 (truth) から区別することは常識化してきた。

物理学者の中谷 (1958) と物語論者のブルーナー (Bruner, 1986/1998)、異なる世界に生きた二人であるが、その語りを並べてみると、両者が現実世界をどのように見ていたか、その類似に気づかされる。両者ともに、「現実世界」がまずそこに単純に実在するという「素朴实在論」を否定している。また、科学法則や理論が、素朴に実在する自然世界を、鏡のように写し取ったものとする「素朴反映論」的な見方をとらない。どちらも、世界をある種の思考形式によって構成したものが学問であるという見方をしている。その思考形式として、物理学者は「現在の科学の思考形式」を、物語論者は「ある種の記号体系」をあげている。

ブルーナーが、パラダイム・モード（日本語訳では、論理実証モード）とナラティブ・モード（物語モード）を区別しているやり方にならえば、「現在の科学の思考形式」を「科学のパラダイム」（Kuhn, 1962/1971）と言い換え、「ある種の記号体系」を「ナラティブ（物語）」と呼ぶこともできるだろう。

なお、両学者とも素朴实在論を疑い、学問世界が「構成」されていると言っているが、現実世界の「実在」のすべてが「構成」されているとは言っていないことに注意されたい。筆者の「モデル構成」も前者の意味である。後者の意味では、限りない相対化に陥る危険がある。

ブルーナー (Bruner, 1986/1998) は、「ひとたび根元的世界の実在が捨てられると、世界の正しいモデルを誤ったモデルから区別する方法としての対応の基準を、われわれは失う。こうした条件のもとでは、後続しそのような相対主義の奔流から、われわれは何によって身を守れようか」と述べている。

学問にとって批判は重要であるが、限りない相対主義からは守らなければならない。なぜならば、相対主義は、普遍主義を批判するための対抗概念でしかなく、同じ枠組みから出られないからである。デリダ (Derrida, 1996/2001) もまた、彼の「脱構築」が単なる破壊的批判や相対主義と間違えられることを憂い、彼の立場は文化相対主義でも多文化主義でもない、なぜならば「相対主義には責任がない」からと述べている。単なる相対化だけでは、学問にとって生産的とは

いえない。

ここでは、ブルーナー（1986）がグッドマン（Goodman, 1978）を引用して述べている「諸世界の多重性」、つまり、「還元不可能な諸世界が複数存在する」「いくつかの真理は相容れないが、どれも真理である」という立場をとる。つまり、多重の現実世界を考えるのである。多重とは、単なる複数化、つまり数量的に多いことではなく、世界を見る異質の見方が複数あるという意味である。

## 2 4つの現実世界

研究者は、空気のようなニュートラルな存在ではありえないから、自分自身の研究が拠って立つ現場の立ち位置や自分自身の世界観と方法論に対する鋭い自覚と省察が必要である。筆者は「モデル構成的現場心理学」において、研究者自身がめざす「研究目的」と「研究方法」を自覚的に組み合わせ選択し、それを明示することの重要性を論じた（やまだ, 1986）。

さらに本論では、そのような具体的な研究目的や研究方法の選択の前提として、より大きい枠組みとしての世界に対する見方を扱うことにした。ナラティブ研究では、従来の自然科学と人文科学など大きな枠組みにおいて暗黙のうちに想定されてきた現実世界の見方や方法を交差し超えてしまうからである。

研究者は自身の研究がどのような「現実世界」にアプローチするのかを明確にすべきである。そのために、多重の「現実世界」の種類を整理するために、表1のフレーム・モデルを試作した。これは、さまざまに入り組んだ認識論的立場を自覚するには、おおまかな見取り図にすぎない。しかし、各種の研究がどのような世界を想定し、どのような世界にアプローチしようとしているのかを、機能的（functional）に見るのに役立つだろう。また、静態的な分類カテゴリーではなく、複雑な相互移行と往還を含むダイナミックなものであることに注意されたい<sup>1)</sup>。

表1のAとBは、現実世界に対する見方を表す。Aの「経験的（experiential）- アクチュアル（actual）」と名づけた見方は、おもに自然科学がとってきたものである。Bの「超越論的（transcendent）- 仮想的（virtual）」見方は、おもに人文科学がとってきた現

実世界の見方にかかわる。二つの用語がハイフンでむすばれているのは、ひとつの用語では言い切れない内容をもつので、両者のうちどちらかの用語、あるいは両方の用語で代表してみたらどうかと考えた。ただし、両用語のウェイトの置き方やむすびつきかたには多様性がありうる。

表1のIとIIは、現実世界にアプローチする方法を表す。I「可能的（possible）- 構成的（constructive）」は、おもに演繹的・仮説構成的・想像的方法をさす。II「実在的（realistic）- 事実に（factual）」はおもに帰納的・実証的・体験的方法にかかわる。

「現実」に関する用語の使い方は複雑で、研究領域や研究者によって異なる。日本語ではさらに錯綜し、ときには正反対に使われるので、各用語には英語を付すことにした。

やまだ・西平（2003）は、「現実性（reality）」をもっとも広い概念とし、その内部に「事実性（factuality）」と「実際性（actuality）」をおく見方をとっている。この場合には、factuality は、客観的な事物など所与としての事実、アクチュアリティ（actuality）は、現実との関与的関わりのみで実行的に現れる現実をさす。しかし現実的（realistic）という用語には、写實的、実念論的、実在的、実存的という意味もあり一律にはいかず、ある場合にはfactualと近い概念になる。そこで本論では、「II 実在的（realistic）- 事実に（factual）」を共通の意味をもつ対のセットにして、「I 可能的（possible）- 構成的（constructive）」と対立させた。

「可能的（possible）」および「構成的（constructive）」という用語は、哲学の長い歴史がかかわっているので、一律の定義は難しい。前者については、あとで3「可能的経験世界」において議論する。

ここでは「構成的（constructive）」という用語について、筆者の立場から簡単に説明する。西洋哲学では、主観と客観、観念と物質、形相と質料、理性と経験、観念論と唯物論などの二元論の極のどちらに比重をおくか、相互の往還によって議論がなされてきた。

たとえばカント（Kant, 1781/2004）は、観念論の伝統をくむ哲学者であるが、主観に対して現象する対象は、人間主観にア・プリオリに具わった形式によって

表1 4つの現実世界  
 ——多重の現実世界を想定したとき、研究者は何を問題とし、どのような方法でアプローチするのか

	A 経験的 (experiential) - アクチュアル (actual) な見方	B 超越論的 (transcendent) - 仮想的 (virtual) 見方
I 可能的 (possible) - 構成的 (constructive) 方法	A I 可能的経験世界 (法則的 nomothetic 物語的 narrative 世界)	B I 可能的超越論世界 (形而上学的 metaphysical 世界)
II 実在的 (realistic) - 事実的 (factual) 方法	A II 実在的経験世界 (物質的 material 世界)	B II 現実的超越論世界 (実存的 existential 世界)

- (注)
- この枠組は、学問領域を分類するためのものではなく、研究者自身が扱う現実世界を自覚するための機能モデルである。
  - A と B は、現実世界に対する見方を表す。どちらかといえば A は、おもに自然科学、B はおもに人文科学がとってきた現実世界の見方にかかわるといえよう。
  - I と II は、現実世界にアプローチする方法を表す。I は、おもに演繹的・仮説構成的・想像的方法、II はおもに帰納的・実証的・体験的方法にかかわる。
  - 黒矢印は、従来から行われてきた相互作用である。「対話的モデル構成」では、黒矢印の対話に加えて、白矢印で示した自然科学と人文科学を横断する対話を重視する。

構成されたものであり、そのような構成に先立つ「物自体」について語ることはできないと論じた。つまり対象となる外界のものを、経験によって認識する他ないという経験論に対して、外界とのかかわり方を根底的に変革し、認識が経験に従属するのではなく、経験を介さない先験的論理 (数学など) によって対象の本質を捉えることができると考えた。

「構成的」という用語を用いる研究者は、クーン (Kuhn, 1962/1971) の「科学革命の構造」などの議論を含めて、スピノザ、デカルト、カントなどの議論の系譜をひいていると考えられる。もちろん、現代の「構成主義者」は、経験論を組み込んで、さまざまなかたちで観念論の限界を乗り越える試みがなされてきた。たとえば本論に直接関係する理論家としては、次のような研究者があげられる。

レヴィン (Lewin, 1936) は、同じゲシュタルト心理学者のケーラーが脳の生理過程という実在の根拠を求めたのに対して、心理学の法則を「構成概念」とみなし、その普遍性の根拠を経験的な平均値ではなく、構成された数学的原理に求めた。

ソシュールの記号論 (「構造主義」) においては、表象体系をカントがいうようなア・プリオリなものとしてではなく、「恣意性」を重視した「差異の体系」と

して構成されると考えた<sup>2)</sup>。  
 ピアジェ (Piaget, 1937) は、カントがいうように知性をア・プリオリな生得的シエマそのものとしてではなく、環境との経験的な相互作用によってダイナミックに発達すると考えた。彼は、「現実の構成 (construction of reality)」つまり、時間・空間・事物などの概念が経験的に構成されると考えた点において、「構成主義 (constructivism)」者であり、観念論と経験論の橋渡しをした。

ガーゲン (Gergen, 1994/2004) は、現代の認識論と方法論のパラダイム変換として「社会的構成主義 (social constructionism)」<sup>3)</sup>を提起している。カントの概念ともっとも大きく異なるのは、「頭の中の知識」という概念に対して、社会的に構成される知識、つまり「知識が共同の関係の産物である」(p.30) ことを主張するところにある。

本論における「構成的」という用語は、これらのうちどの思想的立場に立つかという思想表明ではなく、モデル構成など、現実世界へのアプローチのしかた、つまり広く「方法論」をさすことばとして用いている。

さて、以上のような用語をもとに、表1のように、現実世界の見方 (A, B) と現実世界へのアプローチ方法 (I II) を組み合わせて、4つの現実世界を区別

した。それぞれ「AⅠ 可能的経験世界」、「AⅡ 実在的経験世界」、「BⅠ 可能的超越論世界」、「BⅡ 現実的超越論世界」と名づけた。

「AⅡ 実在的経験世界」は、世界に対する实在論的な立場を示す。自然科学は、実在的経験世界を想定することによって、ある程度成功してきた。このように、自然科学もまた、唯一の真実に至る方法としてではなく、「世界制作の一つの方法」とみなすこと自体が、物語的アプローチに基づいているといえる。しかし筆者は、この自然科学的方法がもつ価値を高く評価している。この立場は徹底的に追求すべきである。

「AⅡ 実在的経験世界」と対極の位置、斜め対角線上に「BⅠ 可能的超越論世界」を置いた。これは、伝統的に哲学（形而上学）が論じてきた世界である。両者は、一方は外部に実在する「客観」、一方はコギト（我思うゆえに我あり）の「主観」をつきつめて成立しており、対極のようでありながら、「普遍的な唯一の真実」を求める点では、共通性が高い。「BⅠ 可能的超越論世界」に対して、抽象的な論理よりも生身の生き生きした現実を扱おうとする「BⅡ 現実的超越論世界」は、おもに現象学や実存主義哲学において長年にわたって議論されてきた。

本論では「多重の現実世界」を前提にしているので、どのような世界観が正しいかという問いの立て方をしない。ただ一つの「普遍的な「真」が「存在」するという立場をとらないからである。したがって、4つの現実世界は、どれも否定されず共存しうると考えられる。大きく見れば、Aは自然科学（心理学を含む）、Bは哲学を中心とした人文科学が扱ってきた世界である。従来の科学の枠組では、AとBの領域内ではⅠとⅡ、つまり黒矢印の相互作用が考えられてきたが、AとBを横断する相互作用は非常に少なかったといえるだろう。

ナラティブ研究や質的モデル構成では、領域横断的な白矢印の対話的な相互作用を試みることに特に大きな特徴がある。たとえば、のちに示す「ナラティブ・テキスト」の概念によって、インタビューの語りデータや観察データや診療記録、小説や映画など芸術作品、新聞やCM、経済や法律や歴史資料など、従来は「心理学」「人類学」「医学」「文学」「社会学」「メディア学」「経済学」「法学」「歴史学」など、多種の学問に

分かれていたあらゆる語りを、テキストという観点から同列に並べて分析することができる。また、のちに示す「対話的省察性」という概念も、特定の対象に依存せず、あらゆるナラティブ間の往還を示す概念であるから、学横断的な対話を促進することができる。このような一般化可能な構成概念を用いたモデル化によって、白矢印にあたる関係性の縦横な対話が期待される。

### 3 可能的経験世界

本論の「対話的モデル構成」研究は、特に「AⅠ 可能的経験世界」を扱うものである。以下は、この立場に重点をおいて考えてみたい。

「AⅠ 可能的経験世界」を扱う研究とは、「ここにある現実」と経験される現象を、理論（法則・モデル）を構成することによって、可能的・予測的・演繹的に説明することをめざす研究として定義される。つまり、今ここにはないが理想形や純粹形や典型としてありえる現象を「可能世界」として想定し、それを理論構成によって、よりよく説明しようとする研究である。

理論化のしかたとしては、「法則（law）」（数学的定式化や数理モデル）や、「構造（structure）」（具体的事象の奥にあると仮定される論理構造や文法構造や深層構造）や、「ナラティブ」（語り行為や物語テキストのモデル化）など多くの種類が考えられる。

ここで、科学法則とナラティブを同列に並べてよいかという疑問が生じるかもしれない。

法則論（ノモロジー）は、ギリシア語のノモス（法、法則）からつくられた用語であり、法則論的・演繹的説明は、自然科学にも社会科学にもあてはまる諸学における説明の基本モデルであると考えられる。その基本モデルは、次のようである。1) ある条件下で、ある特性が現存するときには別の特性も現存するという一般的な法則が成立する。2) ある個物が、実際に第一の特性を持つことが認められるならば、3) その個物は必ずあるいはおそらく第二の特性をもつと演繹される。

科学法則とナラティブは、論理実証（パラダイム）モードと物語モードという、異なる種類のモードに基

づいている (Bruner, 1986/1998)。このブルーナーの本の原題は「アクチュアルな心 (actual mind), 可能世界 (possible world)」と名づけられているが、彼がこの二つのキーワードで示したように、「可能世界」を、どのように「アクチュアルな心理学」として構成するかが対話的モデル構成において重要だといえるだろう。

なお、「可能世界」とは、クリプキ (Kripke, 1980/1985) によれば、『「世界がありえたかもしれないあり方」の全体, あるいは世界全体の諸状態ないしは諸歴史のことである。』(p.20) たとえば, もっとも簡単な例では, 確率はミニ可能世界であり, 実際に出たサイコロの目は「現実世界」, あとの確率が「可能世界」であるといえよう。しかし, 「実際の場面では, われわれは出来事の反事実的なあり方を完全に記述することはできないし, またそうする必要もない。その『反事実的状況』が現実の諸事実からしかるべく異なっているさまを, 実際的に記述するだけで十分である。』(p.21) クリプキは, 分析哲学をもとに可能性や必然性の真偽や実在を問う様相論理学を基に論じている<sup>4)</sup>。しかし, ここでは, 論理学を離れて「現実世界は無数の可能世界のなかの一つである」という比較的ゆるい意味で使うことにしたい。

科学法則とナラティブでは, 当然ながら, 「可能世界」のつくり方も異なる。科学法則は, 普遍性や不変性をもとに検証可能・反証可能な唯一の定式をめざし, 物語は, 変化しうるプロセスや多様なパースペクティブをもつ複数の世界をつくらうとする。しかし, 両者ともに, 「可能な形式」としての「フォルム (形相)」を, 形而上学的にはなく経験的に追求することでは一致していると考えられる<sup>5)</sup>。

「ナラティブ」は, 「記号」や「構造」という概念をベースにしながら, フォルムに対する見方を根本的に変化させている。現代記号学と構造主義の祖といわれるソシュール (Saussure, 1922/1972) は, 「形相」と「実質」を対立させ, 「言語 (ラング) は形相であって, 実質ではない」と考えた。ソシュール的な意味では, 形相 (フォルム) は「構造」と同義語であり, それは実質を含まない「差異の体系」である。彼によれば, 音響的イマージュ (聴覚映像) は形相であり, 「実質」(音的な現実) とは区別される。

ソシュールの思想をもとにした考え方の転換は,

「言語論的転回 (linguistic turn)」と呼ばれる。そこで成立したのは, ことばの意味を実質や実在の事物を指示するものとしてとらえる言語学ではなく, 世界を関係構造によってとらえるフォルムの学としての記号学である。それは, 構造主義とも呼ばれ, 人類学者のレヴィストロースや, 精神分析学者のラカンに大きな影響を与えた。記号学は, 批判されながらもさまざまな系譜で継承され, ナラティブ研究の源流のひとつとなった。

記号学がもたらした大きな転換, それは, ポスト構造主義のひとりとして位置づけられるデリダ (Derrida, 1967/2005) の用語を用いれば, フッサールの現象学の根底を揺るがすものであった。つまり「声 (フォーン, 音声的エレメント)」と表現とのあいだに本質的で必然的な絆を想定したフッサールの哲学体系全体が脅威にさらされるほどの, ものの見方の転回であった。

構造主義は, その後のポスト構造主義やナラティブ・ターンによって, 静態的な「構造」は批判され, よりアクチュアルな「対話」「相互行為」「プロセス」が強調されるようになった (やまだ, 2006b)。

本論の「対話的モデル構成」は, このような記号学を経由した後のナラティブ論の立場に身をおく。しかも, 研究者自身も, 特権的な位置におくのではなく, 対話プロセスの一環として省察的に入れ子として含み込むことをめざしている。筆者の立場をキーワードにすれば, 「対話的プロセス, 可能的形式としてのナラティブ」 (Dialogic process, Possible forms of narrative) といえるだろうか。

世界を見るもの見方と, それによって見えたものを, 個々の個別事例を貫く原理や, ある程度一般化した「形式 (フォルム)」としてとらえたいという第一の関心, しかもそれを静態的な「構造」としてではなく, 対話的に相互生成的に変化する「生成プロセス」によって説明したいという第二の関心, 「対話的モデル構成」の立場は, それら二つの関心に基づいている。それは, 基本的には, ほかの3つの領域の世界観, 自然科学的な世界観, 形而上学的な世界観, 実存的世界観においても共通するもので, 学問の知 (知識と知り方の体系) は, そのような関心によって支えられているといえよう。

したがって, 対話的モデル構成は, 「A I 可能的経

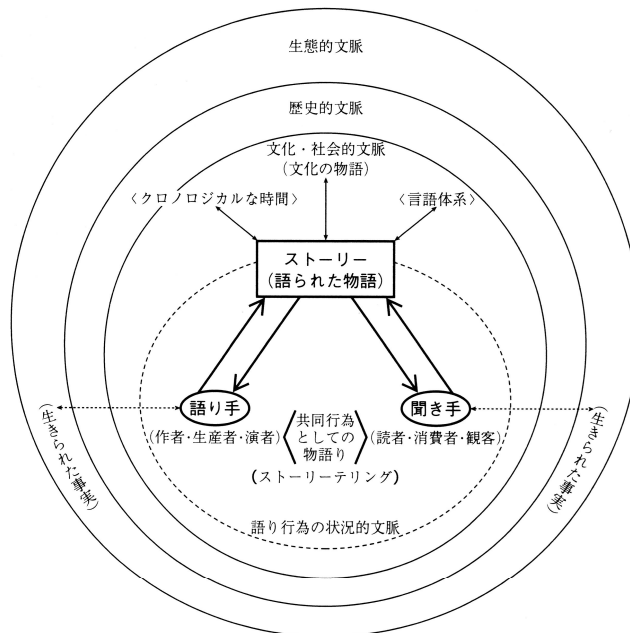


図 I-1 物語 (ストーリー) と語りの共同行為

図 1 ナラティブが生成される多重の文脈 (やまだ, 2000 より)

験世界」に位置をしっかりと定め、そこに軸足をおきながら、他の世界観をもつ3つの領域と対話を重ねていくことをめざすのである。とくに、従来からある黒矢印の対話に加えて、白矢印の領域横断的な対話、自然科学的思考と人文的思考の対話を重視する。

モデル構成の作業は、たとえ知の系譜を批判的・否定的に継承するとしても、学問によって論じられてきた論点と対話的に切り結び、知の体系に参与して新たな知をつくっていく共同作業を担うのである。そうでなければ、個別事例の矮小化した記述「私語り」「旅日記」「体験談」を羅列するか、「常識」を再生産するだけのものとなり、創造的な知活動とはほど遠いものになってしまうだろう。

## II 多重のナラティブのあいだを往還する対話

### 1 多重の現場<sup>フィールド</sup>とナラティブのレベル

ナラティブは、多重の現場、多重の文脈において、語り手と聞き手の相互行為によってなされる。その関係性は、やまだ (2000) が示したように、多重の入れ子関係として、図 1 のように集約的に表される。本論では、図 1 のようにナラティブが多重の文脈のなかで生成される相互行為であることを前提とした上で、図 2 のように「ナラティブのレベルとその現場の特徴」を立体的にモデル化した。図 2 によって、研究者が位置する現場の特徴と異なるナラティブ・レベル間の対話を立体的に明確にしたいと考えた。

まず、ナラティブの多重のレベルと各レベルにおける現場の特徴を、I 実在のレベル (当事者の人生の



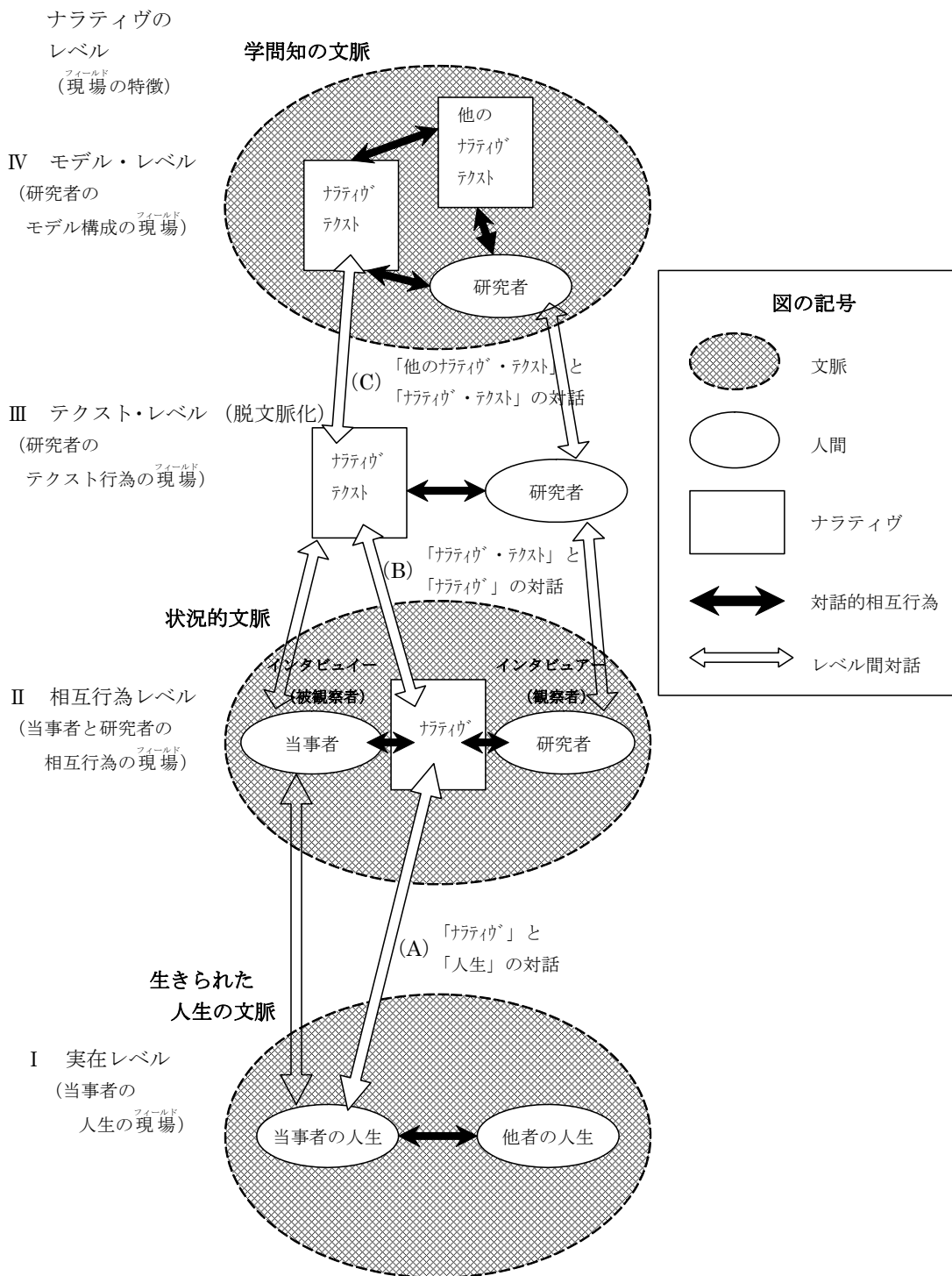


図2 多重のナラティブ・レベルと現場の特徴

現場)、Ⅱ相互行為のレベル(当事者と研究者の相互行為の現場)、Ⅲテキスト・レベル(研究者のテキスト行為の現場)、Ⅳモデル・レベル(研究者のモデル構成の現場)の4水準に分けた。このモデルは、おもにライフストーリーの語りをインタビューで聞く場合を想定して作成している。しかし、インタビュー場面に限らず、相互行為の観察データ分析や言説分析など、ほかのナラティブ研究にも通用する一般的図式である。

Ⅰ実在のレベルでは、〈当事者の人生の現場<sup>フィールド</sup>〉が、[当事者が生きた社会・文化・歴史的な文脈]において問題にされる。当事者(Aさん/A集団の人々)は、他者(Aさんと関係する人々、家族・友人など)と関係をむすんで相互行為を行いながら生きている。ここでは、当事者が生きた人生や生活や生(lives)の実態があると推定される。しかし、このレベルは、当事者が研究者である場合か、当事者に直接関係しながら人生を共に生きる他者(親や夫婦など)が研究者を兼ねる場合以外では、研究者は直接アクセスすることができない。

Ⅱ相互行為レベルでは、〈当事者と研究者の相互行為の現場<sup>フィールド</sup>〉が[状況的文脈]において問題にされる。当事者(Aさん/A集団の人々:インタビューあるいは被観察者)と研究者(インタビュアーあるいは参与観察者)の対話的関係において「ナラティブ」が生成される。ここでは、「ナラティブの相互行為の参与観察」「インタビュアーとインタビューの関係性」などが問われる。「会話分析」「談話分析」「エスノメソドロジー」などが扱ってきた現場といつてよいだろう。

Ⅲテキスト・レベルでは、〈研究者によるテキスト行為の現場<sup>フィールド</sup>〉において[テキスト]が問題にされる。後に述べるように、テキストは、コンテキスト(文脈)に入れ子に埋め込まれているが、コンテキストから相対的に自律し脱文脈化するものである。当事者が生きた人生の文脈やナラティブの相互行為の状況的文脈から相対的に「脱文脈化」され、研究者はある種の自由度を得て、テキストとの対話が行われる。ここでは、「ナラティブ・テキストを読む(語る)行為」「言説(ディスコース)分析」「エクリチュール」「解釈行為」「テキストの加工や編集(切断・引用・代表化・並べかえ)」が行われる。

Ⅳモデル・レベルでは、〈研究者によるモデル構成の現場<sup>フィールド</sup>〉において、[学問知の文脈]が問題にされる。ここでは、研究者による学問知の文脈(知識と知の方法の体系)への位置づけがなされる。「著書や論文として書く(語る)行為」「ナラティブ事例の抽出と解釈」「他事例との比較検討」「問題、論点(issue)への解答」「理論やモデルの構成」などである。

## 2 対話的相互行為とナラティブ・レベル間の対話

図2に示したように、それぞれのレベルでは、「対話的相互行為」が行われる。それを、黒矢印で示した。Ⅰ実在レベルでは当事者と他者、Ⅱ相互行為レベルでは当事者と研究者、Ⅲテキスト・レベルでは、ナラティブ・テキストと研究者、Ⅳモデル・レベルでは、研究者と当事者のナラティブ・テキストとほかのテキストや概念との対話である。

また各レベルを往還する「レベル間対話」も行われる。それを白矢印で示した。(A)の矢印は「当事者が生きている人生」とインタビューや観察場面で「語られた人生」との対話的相互作用である。当事者のなまの人生がそのまま語られるわけではなく、そこから相互行為レベルの現場において「ナラティブ」が生み出される。その「ナラティブ」は、当事者によって、繰り返し(A)の対話によって、確認されたり、ズレをもって語り直されたりする。(B)は、相互行為レベルで「語られた生のナラティブ」とそれを文字などによってテキストにした「テキストのナラティブ」との対話である。この対話は、おもに研究者によってなされる。(C)は、「元のナラティブ・テキスト」と、ほかのテキストとつぎあわせて抽出されたり比較されたり編集された「編集ナラティブ・テキスト」との対話である。このように、図2では、「ナラティブ・テキスト」という同じ名称になっているが、そのテキスト内容は、扱うレベルと現場によって異なったものになる。研究者と「ナラティブ」との対話的相互行為は、ナラティブ・テキストやナラティブ・モデルの産出にも、それをリフレクションする省察にも使われる。

図2では、多重のナラティブのレベル間対話をあらわす白矢印の他に、異なる場にいる人間と人間も白矢印で示し、レベル間対話を行う図式にした。異なる現

表2 ナラティブを見る観点, 理論的立場, ナラティブ収集方法

<p><b>1 ナラティブを見る観点</b></p>	<p><b>A ナラティブ・相互行為</b> (現前で生起する会話行為のプロセス)  相互行為プロセス, 社会状況と社会的現実の構成, フィールドへの実践的参入</p>	<p><b>B ナラティブ・物語 (ストーリー)</b> (非現前の出来事の物語の語り)  語りによる経験の組織化, 経験の意味づけ方, 物語の語り方, 語られた物語の内容や時間</p>	<p><b>C ナラティブ・テキスト</b> (非現前の出来事を書いたもの)  テキスト読解, テキスト解釈, テキスト比較, テキストの脱構築, テキストを書く行為</p>
<p><b>2 理論的立場・研究領域</b></p>	<p>シンボリック相互作用論, エスノメソドロジー, 社会現象学, 社会的構成(構築)主義, 状況論, 社会文化的アプローチ, 言語行為論, 言語ゲーム論, 談話心理学</p>	<p>シンボリック相互作用論, ナラティブ・アプローチ, 対話論, 物語論, ライフストーリー, 自伝的記憶, 伝記, オーラルヒストリー</p>	<p>ポスト構造主義, エクリチュール論, 新解釈学, 物語論, ディスクール論, 文化表象論, 社会的表象論, 精神分析</p>
<p><b>3 ナラティブ収集方法</b></p>	<p>フィールド参与観察, VTR録画, 会話分析, 談話分析, 相互作用記録, アクションリサーチ</p>	<p>半構造化インタビュー, 語りインタビュー, ライフストーリー・インタビュー, オーラル・ヒストリー・インタビュー, フォーカス・グループ・インタビュー</p>	<p>文献, 文学作品, 映画, 写真, 民話, 報告書, メディア, 文化現象などのテキスト, エクリチュール(書かれたもの)の収集</p>

場にいる当事者が, 別の現場にいる(いた)当事者と対話する相互作用を想定するのである。筆者は「昨日の自分は今日の他人」ということばで表しているが, 過去の自分が書いた日記を, 現在の自分が省察的に見直すときのように, 語られる時間や場所, ナラティブの文脈や宛名が異なれば, 同じ人間といえども「他者」とみなして対話する必要がある。研究者についても同様で, 現在の自分が過去の自分が行った語り分析を省察的に見直すときには, 過去の自分(他者)を批判し, それに反論する他者(過去の自分)との対話が行われる。このように, たとえどのナラティブ・レベルでも同じ研究者が研究を担っていたとしても, 異なるレベルにおいて異なる相互行為を行っているときには, 「他者」とみなして対話したほうが多声的な考察や深い省察を可能にするであろう。

**3 ナラティブを見る観点, 理論的立場, ナラティブ収集方法**

研究者が対話する現場の特徴を図2のような水準に分けると, 現在行われている多様なナラティブ研究を, いくつかの特徴で焦点化することができる。表2は, 「ナラティブを見る観点」を中心に, 「おもな理論的立場」「ナラティブ収集方法」によってまとめたものである。

「ナラティブ・相互行為」は, 図2のIIレベルで行われる当事者と研究者の「相互作用」(黒矢印)に特に焦点が当てられる研究である。そこでは, 「現前で生起する会話行為のプロセス」が問題の焦点になり, 広義の「観察」が方法論の中心になる。エスノメソドロジーや談話分析などが代表的な研究であろう。心理学において, もっともなじみ深いのも, この領域である。

「ナラティブ・物語(ストーリー)」は, 図2のII

レベルにおいて、「語られたストーリー」、つまり生成された「ナラティブ」におもに焦点をあてるものである。そのナラティブも、どのような状況的文脈で生み出されたかというナラティブの相互行為や語り口と関係づけて考察される。しかし、それよりも分析の中心は、図2のIレベル（生きられた人生）と関係づけられ、「人生の経験」が時間において、どのように語られ組織化されるかというところに焦点をおく。したがって、インタビューという方法が有力になる。ライフストーリー研究などが代表的である。

インタビューでは、観察とは異なり、当事者の「行為」そのものではなく、「経験の語り方、言語化のしかた、意味づけ方」に焦点が当てられる。相互行為の観察は、出来事が起こりつつあるとき、現前の行為の進行プロセスに焦点が当てられるので「観察」が適している。それに対して、インタビューの語りは、「現前でない（過去あるいは未来の）出来事」に対する「現在の語り」に焦点が当てられる。

たとえば、スポーツの実況中継では、「打ちました！ あっ、球がぐんぐんのびています。ホームランでしょうか？ いや、ファウルになりました」というナラティブのように、刻々と変化する現前の出来事のナラティブも不可能ではない。しかし、実況でさえ、現前の出来事から時間的にやや遅れないと言語化できず、現前にない既成のルールと「物語様式」（投げる・打つ・長打・ホームランの予測）を使って、ようやく語れるのである。「いつ、誰が、何をどうして、どうなったか」という出来事のエピソード的ナラティブは、現在進行形では語れない。出来事の渦中にある現場のさなかでは、ことばにならないのが普通である。

表2のナラティブを見る観点として、もう一つ重要なのは、「ナラティブ・テキスト」である。テキストとは、「（非現前の）出来事を書いたもの」であり、図2のⅢの「テキスト・レベル」に位置づけられる。あとで説明するように、テキストは広い概念であり、多重につくられるので、語りプロトコルからモデルまで、多くのレベルのものを含む。

「書く」「読む」という行為自体は現前の場所で行うことができるが、その行為によって生成されたもの「書かれたもの」「読まれたもの」は、自動書記というような特殊な方法をとらない限り、現前の出来事を

そのまま現在進行形で生成することは難しい。ナラティブ・テキストは、あとで何らかの編集作業や加工を加えたものである。これも、静態的な「作品」ではなく、書き手と読み手の相互行為によって共同生成される。

ナラティブ・テキストの分析は、従来は文学や哲学など、人文科学の領域であり、心理学者が行うことは少なく、ほとんど議論されてこなかった。しかし、ナラティブ研究や対話的モデル構成においては、「テキスト」の位置づけが非常に重要になると考えられる。そこで次に、「テキスト」概念とその位置づけについて議論する。

### Ⅲ ナラティブ・テキストと対話的省察性

リフレクシビリティ

#### 1 テキストとは

ナラティブ研究では、「テキスト」という概念が非常に重要になると考えられる。そこで、本論では特に、図2のⅢ「テキスト・レベル」を中心に、「テキスト」に焦点をあてて、考えてみたい。

テキストの定義は、研究者によって異なる。ここでは簡単に「広義の言語（記号）で語られたもの、あるいは書かれたもの」と定義しておきたい。テキスト（text）は、原文、本文、典拠、教科書、引用句などを意味するが、ラテン語の原義は、「（布の）織りの型」であり、やがて「ことば・構造」などをさすようになった。織物（textile）、原型・基本形（prototype）、主題（topic）、意味（meaning）、原理（principle）などが類義語である。コンテキスト（context 文脈）は、織り（テキスト）合わせ（コン）という意味である。テキストはコンテキストと複雑な関係をむすぶ。

人文科学の思考を速記にとるなら、それはかならず独特のかたちの対話になるはずだ。すなわちそれは、テキスト（研究され考察される対象）とテキストの枠組になる（問いただして反駁する）コンテキストの複雑な相関である。学者が認識し評価をくだす場所はここなのだ。それは二つのテキスト—すでにあるテキストとつくりだされ応答

するテキストの出会いなのだ。したがってそれはまた二つの主体，二人の作者の出会いでもある。  
(Bakhtin, 1988, pp.199-200, やまだによる訳語改訂)

世界を，文脈から切り離された個物の単純な局在化としてみるアトミズム世界観に対して，網目や織物としてみる関係体世界観をとる（やまだ，1987，2006b）と，テキストという用語は，その関係体を表す網目の一部として重要な用語となる。

バルト（Barthes, 1979）は、「物語の構造分析」において、「作者の死」という印象的な表現で，文学における「作品からテキストへ」の移行を述べている。かつて「作品」は，その奥に「実在」すると仮定されていた「作者＝人格」の表現として読み解かれるものであった。それが，構造主義によって，「作品」は，自律的な関係構造として読まれるようになった。しかし，その「構造」は，まだ言語内の閉じた構造をさしており，読者との関係性を含むものではなかった。それが，書き手だけではなく，読み手の読書活動も含めた言語活動の織物「テキスト」という概念へ変化したのである。

このような「テキスト」観は，「いかなるテキストも，主体，作者（話し手・書き手）をもつ。」（p.194）という，バフチン（Bakhtin, 1988）の対話概念やテキスト概念と矛盾するようにみえるし，実際にいくらかズレがあると考えられる。しかし，バフチンの「作者」は，従来の文学作品で扱われてきた作品の背後に実在する単一の「作者」とは異なる概念であり，「文の話者として想定された人物」までも含むポリフォニックな主体である。また，「創造者を彼の創作のなかにもみ見るのであって，決してその外にはでない。」（p.327）という考えは，現代のポスト構造主義のテキスト論にむすびつけることができるのではないだろうか。

バルトは，さらにテキストを次のように説明している。テキストを構成する運動は，横断である。テキストは，いくつもの作品を横断することができる。テキストは複数的である。テキストは，いくつもの意味をもつというだけではなく，意味の複数性そのものを実現することにある。テキストは生成される。テキストは，成熟という有機的過程，深化という解釈的過程，

作者の意図を推測する了解的過程にあるのではなく，ズレ，一部重複，変異といった系列運動によっておこなわれる。テキストは，書き手と読み手を実践的協力者，共同制作者にする。

文学は，「作者」の「作品」を読む学問ではなくなり，「テキスト」の学となった。作品からテキストへの変化は，次のような変化として言い換えることができるだろう。1) 作者の表現や所有物としての作品から，書き手と読み手と観察者（批評家）の関係のなかのテキストへ。2) 物質として手にできる物としての作品から，ナラティヴという言語活動のうちにある，方法論的場としてのテキストへ。3) 一種の普遍的記号として解釈される作品から，記号表現が生成される場としてのテキストへ。

「テキスト」という用語は，自然科学を中心に学横断的に用いられてきた「データ」に匹敵する，学横断的な基礎用語になるのではないかと筆者は考えている。

従来，心理学では，「データ」という用語を用いてきた。データは，「与えられたもの」を語義とし，経験所与（datum），実験や計算に基づく事実（datum）をさし，「事実，証拠，基礎資料，情報」を意味する。その類似語としては，証拠（evidence），物質・素材（material）などがある。

ナラティヴを，「語りデータ」「質的データ」ということばで記述できないわけではなく，筆者も使ってきた。しかし，データは，基本的には，表1の「実在的-事実的」世界において使われてきた用語であろう。データが「与えられた事実としての物質」であるのに対して，テキストは「織りの型としてのことば」である。

テキストは，数量的研究における「ローデータ」の意味に該当するだけではなく，統計処理後の「因子行列」「分散分析表」など「計算図表」の意味にも，さらにそれを精選加工した「説明図表」の意味にも該当する。テキストは「テキストのなかのテキスト」「テキストについてのテキスト」など，重層的にさまざまなレベルで用いられる。

## 2 テキストの特徴とレベル間対話

テキストという概念の特徴は，おもに次の点にある

と考えられる。1) 学問横断的に用いられる。2) 相対的に脱文脈化でき自由度をもつ。3) 時間・空間的に「距離化」して利用できる。4) 書き手と読み手の相互作用によって共同生成される。5) 種々の現場の多様なナラティブをレベルを超えてむすびつける働きをする。

第1に、テキストは、学横断的な概念であるから、いったん言語テキストに変換すると、それは領域を縦横に横断することができる。

それは、数量的研究における「数量的データ」の役割に匹敵すると考えられる。「数量的データ」は、物理学でも、化学でも、経済学でも、心理学でも、学問領域にかかわらず、いったん「数」という共通言語にのせると、学横断的に同じ土俵にのせて取り扱える。

「数量的データ」と同様に、文学が扱ってきた小説の「テキスト」も、心理学者や社会学者がインタビューで得た語りプロトコルの「テキスト」も、政治学者や経済学者が扱ってきた新聞の政治欄や経済欄の「テキスト」も、ヒューマン・ドキュメントの日記やインターネットの「テキスト」も同列に並べて、読むことが可能になるのである。

第2にテキストは、相対的に「脱文脈化」できるので、自由 (freedom) と自律 (autonomy) を得ることができる。第3に、テキストは、語られた特定の「ここ」という時間や空間や具体的な宛名や文脈を超えて、遠くの場所、「距離化」した場所でも、そのテキストを利用できる。図2のⅢ「テキスト・レベル」では、テキストのもつ脱文脈化と距離化という特徴を図示している。この「脱文脈化」と「距離化」という概念は重要なので、のちに改めて論じる。

テキストの第4の特徴は、テキストが「語り手」「読み手」「書き手」の共同生成で成り立つことである。テキストは、「語る」「読む」「書く」という行為をむすびつける役割をする。研究者は、他者が語った「ナラティブ・テキスト」の「書き手」であると共に「読み手」であり、それを研究者自身の文脈のなかに位置づけて「語り直す」語り手であると共に、それを研究論文として書く「書き手」でもある。テキストは、「語る」「読む」「書く」という言語行為を対話的にむすびつける役割をする。

第5に、テキストは、種々の現場の多様なナラティブ

を、レベルを超えてむすびつける働きをする。

図2のⅢ「テキスト・レベル」は、一方ではⅡ「相互行為レベル」へ、もう一方ではⅣ「モデル・レベル」へむすびつく。テキスト・レベルが、それらのあいだの曖昧なポジションにあり、中間段階に位置づけられることが重要である。テキストは、白矢印で表した、ⅢとⅡ、ⅢとⅣとのレベル間対話を担える位置にある。

「ナラティブ・テキスト」は、図2の白矢印(B)にあたる「レベル間の対話プロセス」(何度も元の語りやテキストに戻る)に加えて、「異なるテキスト間」も対話的にむすびつける役割をする。

ナラティブ・テキストは、一種類ではなく幾つものつぐられ、「多重テキスト化」が行われる。たとえば、やまだ(2003)では、録音テープをローデータ、それを逐語的に起こし文字化したプロトコルを1次テキスト(1次データとも呼んできた)としている。方法論的には、この1次テキストを愚直なまでに丁寧に信頼できるテキストとして作成することが重要である。一度信頼できるプロトコル・テキストを作成しておけば、あとで疑問が起きたり分析し直すときには、何度でもそこに戻ることができ、他の研究者とも共有できる透明性が確保できる。

テキスト化されたあとは、丁寧に謙虚に素朴に、ありのままのテキストと付き合うことが何よりも大切と考えられる。1次テキストを丁寧に「書く」(ナラティブを文字化する)「読む」(虚心に何度も読む)ことが、すべての作業の基礎になる。

その後、研究目的に応じて2次テキスト、3次テキスト、4次テキスト、5次テキストと加工を加えていく。やまだ(2003)では、2次テキストは段落に区切ってナラティブに番号を付加したもの、3次テキストは語りを抜き出してカード化したもの、4次テキストはKJ法図解、5次テキストはKJ法図解の文章化である。

これらの加工は、フィールドの鉱脈や原石からダイヤモンドを磨き出すようなプロセスである。しかし、この方向性は一方的ではなく、対話的である。テキスト化によって、ダイヤが発見できなかったときに元の鉱脈に戻るだけでなく、ダイヤにした後も、加工前の種々の段階の原石も形として保持できるようにする。

テキスト化は「抽象化」や「概念化」を意味するのではない。テキスト化によって音声や表情や行為の「肉体的性」や「現場性」は失われていく。しかし、録音された語りを何度も聞き、テキストを何次にも書き重ねる作業をするうちに、他者の語りが分析者の血肉になってエンボディ化されることも多い。文字化されることによって、ますます語り手の「声の響き」が聞こえ、「顔色」までが浮かびあがるようになる。もちろん、生き生きした語りは、できる限り抽象化しないで、最終テキストまで生かす工夫も必要である。他者の語り和分析者との対話は、多重のテキスト化によって、より深められる。

このようにテキスト・レベルのプロセスを多重化して、それが見える形にしておくこと、いつでも簡単にもとの1次テキストの文脈に戻れ、何度も対話的にテキスト間の往還ができることが重要である。

### 3 テキストと脱文脈化—「はなれる」「むすぶ」

図1のように「語り・物語」は、生態的・歴史・文化・社会的文脈、時間・空間・状況的文脈のなかに埋め込まれており、関係性の網目から切り離すことはできない。しかし、関係性の網目にこだわるほど網目から埋められて出られなくなる。幾重にも詳細な具体例を分厚く記述する必要がでてきて、きりが無い。また、個別の具体例が分厚く記述されるほど、そのままでは一般化可能性はうすくなり、共通理解はむずかしくなる。

ナラティブ・テキストは、文脈を大切にしながらも、文脈を一時的に切って、相対的に自律し脱文脈化できる力をもつと考えられる。それによって、相対的にはあるが、もとの文脈から切り離して自由に加工したり、並べ変えたり、新しいむすびつきをつくる自由度を得ることができる。

数量化したあとの数字は、その数字がもとはどこの文脈からやってきたかを抜きに、自由に加工できる。それが数学の抽象化の強みである。広義の言語で記述されるナラティブ・テキストは、翻訳の困難を抱え込みローカルであるのに加えて、抽象化しても言語が意味をなすには文脈が必要で織物としての性質を完全に離脱することはできない(やまだ, 2006b)。しかし、

テキストにしておけば、もとの文脈からある程度は自律して使用できる。

たとえば「引用文」は、もとの文脈におかれて初めて意味をなしていた。しかし、ある断片を自分の文脈のなかに「引用」して、まったく別の意味をつくることのできる。時間・空間的に遠くまで飛んで、引用できるのである。引用テキストとして流通しているうちに、「ことわざ」のように、誰がいつ語ったことばか、作者も原典も不明になるかもしれない。元の意味とは異なる意味で誤用されたり、あとでオリジナルとは部分的に異なることばになったりして、変化・変奏されていくかもしれない。

テキストは、生きた織物であるから、「いつ、どこで、誰が」という文脈から「はなれて」も生きつづけるし、テキストの読み手や書き手との対話によって改変されつづける。テキストは、そのように文脈から「はなされる」ことで、誤用や変形されるかわりに、新しい「むすび」も生み出し、新しいのちが吹き込まれるのである。

このように「はなれる」「むすぶ」という2つの働きのキーとなる位置に「テキスト」概念がある。やまだ(1987)は、乳児期を対象に、ことばが生まれるためには、「はなれる(脱文脈化と距離化)」働きが重要であることを理論化した。また、やまだ(2000)は、成人期を対象に、物語の生成概念として、「離れた場所にあるものの結合による生成(むすぶ)」という概念を考えた。「はなれる」「むすぶ」は、このように文脈を異にして理論化してきた二つの動詞的概念であるが、今ここで新しい文脈でむすびつけることによって、新しいナラティブ論が展開できるであろう。

やまだ(1987)は、「はなれる」概念は、次の4種類の離脱化と可動化があると考えた。(1)行動様式どうしが「はなれる」。(2)文脈から「はなれる」(脱文脈化)。(3)目的から「はなれる」(実用からはなれる)。(4)情動から「はなれる」ことである。特に強調したのは、目的のための手段や道具としての利用、つまり実用的に「はなれる」概念をとらえるのではなく、その「自由」な「離脱化」と「可動化」を強調することであった。

役立つか役立つかわからない、何のためと

はいえないあいまいな状態になると、そのなかの一部だけが何かに縛られていない自由さゆえに創造的な新しいむすびつきを生むことがある。しかし、それは始めからわかっているわけではないし、大部分は、役立つという観点からみるならば、むしろマイナスになるような発達がありうるということである。

常にプラスに向かう発達、「再びむすびつける」ための強力な意志を養成してきた西欧の思想は、無、あるいはマイナスへ向かう発達、あるいは実用からみればマイナスだが、見方を変えればプラスにもなるといった、「両行」する柔軟な発達観は育てなかったのではないだろうか。(やまだ, 1987, pp.328-329)

やまだ(1987)は、脱文脈化と共に「はなれる」働きを構成するのは「静観的認識」による距離化だと考えた。距離化(distancing)とは、ウェルナーとカプラン(Werner & Kaplan, 1963/1974)によれば、シンボル活動の4つの分化をさす。(1)人(話し手あるいは聞き手)と指示対象(referent)の分化,(2)人とシンボル体(symbolic vehicle)の分化,(3)シンボル体と指示対象の分化,話し手と聞き手の分化である。彼らは、以上のように4つの構成要素の「分化」を考えたが、それだけでは不十分である。やまだは、距離化の概念にとって重要なのは、「主体(自己)の居場所」からの距離化であると考えた。距離化には、「ここ」にいながら遠くを視野にいれるものの見方(静観的認識)と、主体の居場所(ここ)から、時間的空間的に遠く離れることができる記号化が必要である。

以上のような「はなれる」働きの重要性は、テキスト概念についても同様に考えられる。「脱文脈化」としては、あとで何とむすびつくかがわからない「はなれ」によって、思いがけない「むすび」の生成的機能が生じる。また、語りは、話し手と聞き手によって成立し、宛名と意図をもって生み出されるが、それらが距離化して「はなれる」ことによって、「テキスト」化が可能になる。テキストは、語りが埋め込まれた元の文脈や作者の意図とはなれて、自由に自律し浮遊するからこそ、「引用」や「我田引水」ができるのであり、新しい「むすび」による物語化が可能になる。

また、「はなれる」「むすぶ」というキーワードをもとに、従来の質的研究の方法論を読み直すことができ

る。KJ法では、従来はフィールド・ノートで書かれていたものをカードに変えた地点が、方法論の大きな転換点であったと考えられる。このカード化は、脱文脈化としての「テキスト」化という用語で語り直すことができる。カードにすることによって、ノートのように固定した順序性をもつ記録を、カルタのように自由に混ぜたり並べたりできるようになり、新しい「むすび」をつくれるようになったのである。

GTにおいても、「データの切片(slices of data)」が重視される。グレイザーとストラウスにおいて、データの切片とは、多様なデータを比較のために集めることを意味する。戈木(2005)では、「データの切片化」は、データ分析の最初の実践的ステップとして、「文脈から距離をとる」ことの重要性が述べられている。

KJ法とGTは、ともに実践的、経験的に鍛えられてきた方法だが、「文脈」を重視しながら、文脈から「はなれる」という、よく似た技法を用いていることは興味深い。

少数の語り事例だけを扱う場合には、文脈のなかに埋め込まれた長いプロトコルのままでも、何度も読めば、何とか解釈できるかもしれない。しかし、研究を何年もすすめるにつれて、何十冊もの大量のノート、膨大なナラティブプロトコル、膨大なVTR記録が蓄積される。そうになると、何らかの方法でテキスト化しないと、それらを処理できなくなる。そのように大量のデータがあると、それらをすべて記憶できないので、それらを真に生かすきってボトムアップで新しい発想を得ることは難しい。結局は、研究者にとって都合の良い事例を「つまみ食い」的に記述することになりがちである。それでは、常識の焼き直し研究にしかならないだろう。もとの文脈に埋め込まれたままでは、語られた時間順序の系列や研究者の考え方の枠組みを超える新たな「発想」を得ることは難しい。文脈に埋め込まれているものを、あえて「はなれる」「はなす」ことによって、生成的に「むすぶ」ことができるのである。

ここでは「テキスト」に焦点をあてた限られた議論にすぎないが、このように、対話的モデル構成法では、ナラティブをつくりだす生成的方法を、研究方法論として理論化し実践化していくことを今後の課題として



いきたい。

#### 4 テクストを読むこと、書くこと

ヒトは言葉を書きつけることで、この宇宙の最大の王「時間」と対抗してきた。……わたしたちの読書行為の底には、「過去とつながりたい」という想いがある。そして文章を綴ろうとするときには、「未来とつながりたい」という想いがあるのである(井上, 1984)。

ナラティブ研究においては、「読む」「書く」行為が大きな位置をしめる。「書く」は、「広義の文字で語る行為」であるから、ナラティブ行為としてのナラティブの一種といえる。広義の文字には、絵やデザインなどヴィジュアルな表現も含まれるからである。文字も(オーラルな)ナラティブの一種とみなす考えとは逆に、「エクリチュール(書く・書いたもの)」という概念を拡大して、オーラルなナラティブ(パロール)もすべてエクリチュールの一種だと考える、デリダのような用語法もある。

テキストは、「読み手」と「書き手」の対話的相互行為の場ともなる。研究者は、テキストの「書き手」「語り手」でもあり、「読み手」でもある。テキストを読むことと書くこととは、相互に関連した行為であり、「語られたテキスト」を「読む」ことは、読み手が自分自身の文脈で「語り直す」という行為を必要とする。読み手が「語り直したものは、それを「書く」という能動的な向かい方(身交い方)によって、さらにテキストを「読み直す」「語り直す」「書き直す」という複雑に往還する対話をもたらす。

テキストにすることによって、ことばは現前の場所で消え去るのではなく、過去とも未来ともつながる「非現前の場所」との往還が可能になる。テキストは、ある種の「形(フォルム)」をつくることによって、時間・空間を超える複雑な往還作業を行う多重の対話の場のできるのである。テキストのもつ、この多重の対話にひらかれる特徴が、のちに述べる「対話的省察性」を可能にすると考えられる。

日常生活においては、口頭で「話す」「語る」行為は、現前の行為のまま終わるほうがふつうである。

それらは、日記や手紙などを書くことを除けば、必ずしも、時間をおいてテキスト化する必要がない。また、ナラティブ行為は、「読む」「書く」行為と必ずしも連関させずに、図2のⅡ状況的文脈においてのみ行うことができる。しかし、研究者がナラティブを扱うときには、ナラティブのテキスト化と、テキストと対話的に「読む」「書く」相互行為を行うことが不可欠である。

ナラティブ研究においては、図2のⅢテキスト・レベルにおいて、現前の状況的文脈から相対的にはなれて、「語られたもの」を繰り返し「読む」「語る」「書く」「読み直す」「語り直す」「書き直す」などの行為を省察的に行うことになる。

テキストを読む作業のうちに、読み手が語り手になる役割交替、「語り直す」ときにズレを生じていくテキスト解釈と語りの相互作用など、幾重もの対話的相互作用を生んでいくことによって、図2のⅣモデル・レベルにおけるモデル構成の土壌ができると考えられるのである。

#### 5 対話的<sup>リフレクティブ</sup>省察性

われわれは明らかに真理を探し求めなければならないが、それは、ヴァージョンが指示するその外側の何かとヴァージョンとの関係のなかにではなく、ヴァージョン自体の特徴、およびヴァージョンの他の諸ヴァージョンとの関係のなかに探し求めねばならない。……解決策は、一貫性のみにはありえない。というのも、誤った、さもなければ正しくないヴァージョンは、正しいヴァージョンと同様、一貫しうるからである(Goodman, 1978/1987, 「世界制作の方法」 p.37)。

従来の数量的研究では「一貫性」や「一致率」が、信頼性の指標にされてきた。しかし、ナラティブ研究を含む質的心理学では、同じ基準で「信頼性」や「妥当性」を検討し担保することはできない。同じ基準で信頼性を高めようとするれば、いつ、どこで、誰が測定しても同じ結果が得られる必要があるから、できるだけ単純な尺度をつくることになり、質的研究の良さが生きなくなる。また、ナラティブは、相互行為でなさ

れるので、文脈によって、あるいは語るたびにヴァージョンが変わるのがふつうだからである。

オールポート (Allport, 1942/1970) は、生活史の信頼性を調べた研究で、2人の研究者が予見した結果、信頼性は低かったが、両方とも妥当性が高かったという。つまり、二人は異なる側面をみていたので、一致率は低かったが、どちらの見方も現実的に意味をもっていた。質的研究では、このように視点の多様性そのものは歓迎されることである。また、プロセスが重視されるので、途中で変化することも重視される。このように、一致率、同一性、不変性、一貫性という数量的研究の信頼性の基準とは、前提そのものが異なる。

質的研究で、数量的研究の「信頼性」にあたるものをどのように考えたらいいのだろうか。筆者は、科学の基本が「再現可能性 (replication)」にあるとするならば、「省察性 reflexivity」概念を洗練することが有効な方法ではないかと考えている。reflexivity は、「反省」「内省」「自省」とも訳されるが、それらは、再帰的に自己の内面に向かう運動を意味するので、ここでは「省察」と訳すことにした。

「省察」は、自己の内面に向かう「反省」や、自己の内面を他者に「内省」報告するだけのものではなく、他者にひらかれ、公共化していく循環運動を含む、対話的プロセスと考えなくてはならない。そこで「対話的省察性」と呼ぶことにした。

ナラティブ研究では、文字通りの「同一性」を再現することはできないが、語り事例のテキスト化によって、似た語り事例や語りのフォームを「ズレを含む類似性」として「多重比較」することは可能である。また、研究者自身の語りデータを公共化して、インタビュー状況も含めて、時間をおいて繰り返しマイクロアナリシスすることで「省察」できる (やまだ, 2006a)。

自己の語りデータだけではなく、他者の語りデータもテキスト化し、テキストを公共化し、相互に対話的に「省察」を重ねることが、「信頼」できるデータや解釈を生み出していくと考えられる。

特に「対話的省察性」と呼ぶのは、解釈や結論を単一に集約するためではなく、テキストが多様化と変化とズレを含むナラティブであることに加え、省察プロセスそのものもナラティブであることを強調するからである。したがって、「同一性」「一貫性」を得るため

ではなく、自己のテキストや解釈を、対話的に「公開し」「公共化」し、他者・読者・批評家との対話プロセスが生成されることが重要である。互いのテキストを「読む」「交換する」「読み直す」などの往還運動を重視し、そのプロセス自体もできる限り透明化し、テキスト化し、アーカイブ (文書記録・集積保存・公共) 化し、他者に開いていくことで、時間・空間を超えた対話が可能になると考えられる。

以上、本論では質的研究の対話的モデル構成の方法論をつくる基礎作業として、いくつかの枠組を提案し、「多重の現実世界」「ナラティブ・テキスト」「対話的省察性」概念について理論化を行った。現実世界は一つではなく、多重であると考えられるが、そのうち対話的モデル構成は、「可能的経験世界」についてのナラティブ・モデルの構成を目的とする。そのためにはナラティブが生成される現場も多重化して考える必要があるが、それを「实在レベル」「相互行為レベル」「テキスト・レベル」「モデル・レベル」の4区分に分けることを提唱した。

上記の4区分のうち、本論では特に「テキスト・レベル」における「テキスト」概念の重要性に着目して考察した。テキスト化によって、文脈に埋め込まれながら相対的に「はなれる (脱文脈化・距離化)」ことを可能にし、新しい「むすび」を生成する契機となる。ナラティブにおける「はなれる」「むすぶ」という働きの一環として、KJ法のカード化やGTにおける切片化を位置づけることができる。

また本論では、従来の信頼性概念を検討して、テキストを「読む」「書く」行為と関連づけて、「対話的省察性」という新しい概念を提出した。質的研究の「省察性」は、数量的研究の「信頼性」に替わりうる概念である。「信頼性」では、いつ誰が見ても同一性と一貫性のある単一の結果が得られることを目指すが、「対話的省察性」では、自己のテキストや解釈を、対話的に「公開」し、互いのテキストを「読む」「交換する」「読み直す」作業を通じて、ズレや相違や変化プロセスを含みながら「公共化」することを目指す。省察性は、再帰的「反省」だけではなく、他者にひらかれ、公共化していく循環運動を含む、対話的プロセスと考えなくてはならない。

## 注

- 1) 表1の作成には、ガタリ (Guattari, 1989/1998) 「分裂分析的地図作成法」に基づく東 (1998, p.200) から示唆をえたが、区分のしかたも内容も大きく異なっている。東の表では、横軸は「実在的 (actual)」と「潜在的 (virtual)」,そして縦軸は「可能的 (possible)」と「現実的 (réel)」,4つの領域は「実在的で可能なものの機械的門」「実在的で現実的なものの流れの体制」「潜在的で可能なものの意識の世界」「潜在的で現実的なもの実存的テリトリー」と名づけられている。なお東は、actual と réel に対して、もとの翻訳とは逆転した日本語をあてており、本論の使い方とも異なるので注意されたい。
- 2) ガーゲン (Gergen, 1994/2004) によれば、カント、ヘーゲル、ソシュールに次のような共通性を指摘できる (pp.10-11)。カントは、人が社会生活を送ることができるのは、当為 (何をすべし、何をすべきでない) の観念があるからだと考えた。当為の観念は、それに反する可能性 (「何をしない」という可能性) を含意する。したがって、社会的行為は、その否定を想定しうる場合のみ、行為として存立し理解可能になる。この考えは、ヘーゲル (Hegel, 1937/2002) の存在と無の概念にも見ることができる。ヘーゲルは、存在を理解するには、それが別様であること (……ではない) も理解しなければならないと考えた。同様の主張をソシュール (Saussure, 1922/1972) にもみることができる。ある能記はほかの所記との差異によって意味を獲得する。つまり言語は、差異のシステムの上に成り立っている。言語を含めて、ほとんどの構造化された記号システムは、二値的な差異のシステムである。例えば、男は女、上は下、感情は理性ということばの差異によって意味を獲得する。
- 3) 「社会的構成主義」は、「構成主義 (constructivism)」と区別して、「構築主義 (constructionism)」とも訳される (上野編, 2001)。
- 4) 「可能世界」論は、「実在論」と「反実在論」の対立にかかわる哲学の大問題とも関係するが、それらとの関係性は一筋縄ではない。たとえば、クリプキ (Kripke, 1980/1985) の様相論理学のモデル理論 (「可能世界」意味論) では、個体や自然種への「指示」が名前 (ことば) から独立して可能であることを示したことで、アリストテレスまで遡る伝統的な「本質主義的形而上学」を現代哲学に復権したともいわれる。「指示」は、実在とことばをむすびつける鍵概念であるが、ラッセル、ウィトゲンシュタイン、

サールなどこれまでの分析哲学の流れのなかでは、「記述 (群) 理論」つまり個体に本質的性質を認めず、個体を群性質の束とみなす、現象主義や唯名論や「反実在論」的な見方をしてきた。しかしクリプキは、「必然性」「可能性」という様相をめぐる考察によって、分析哲学に「指示の固定性」つまり「実在論」的理論をもちこんでおり、論争がつづいている。

- 5) 「可能態」や「形相」という概念には、哲学史の根幹にかかわる長い歴史がある (木田他, 1994 など)。アリストテレスは、エネルギー (現実態・活動) とデユミナス (可能態・能力) を対立概念とした。アリストテレスは、可能態としての「質料 (matter)」が、現実態としての「形相 (form)」をとることによって、個々の事物が生じると考えた。

プラトンは、イデアと形相 (エイドス) を、ほぼ同じ意味に用いた。両方とも「見る」という動詞に由来し、「見られたもの」であるから、「形」を意味する。それは実現されるべき価値であり、理想であり、それに即して行為されるべき規範であり範型であり、感情世界の事物事象を超えた真実有としての永遠の存在でもあった。

現実態は、アクト (act=作用・活動・行為) と訳され、アクチュアル (actual=顕在的・現実的・実際の) はその形容詞である。質料は、その材料となる物質でありマテリアル (material=物質的・原料・資料) はその形容詞である。「データ」は、マテリアルと関連が深いことばである。アクト (現実態) は、アリストテレス的にいえば形相 (form) であり、形相はプラトンのいえばイデアであるから、イデアの対立概念である実在性 (reality) とは区別される。

その後カントは、個々の経験を超えているために認識できないが、諸経験を絶対的に統一するものを、イデー (理念) と呼んだ。また、フッサールは『論理学研究』のなかで「実在的 (レアル) な事物とは、「一つの〈ここといま〉=空間時間的に限定されたものである」として、イデア的なものの非時間的存在と対照させた。

なお本論では、「形相」「形式」「構造」「構成された体系」「形」「型」などを、「フォルム」ということばで統一的にとらえようと試みている。

## 引用文献

- Allport, G.W. (1970). 心理科学における個人的記録の利用法 (大場安則, 訳). 東京: 培風館. (Allport, G.W. (1942). *The use of personal documents in psychological*

- science. New York: Social Science Research Council.)
- 東浩紀. (1998). 存在論的, 郵便的——ジャック・デリダについて. 東京: 新潮社.
- Bakhtin, M.M. (1988). ミハイル・パフチン著作集 8 ことば対話テキスト (新谷敏三郎・伊東一郎・佐々木寛, 訳). 東京: 新時代社.
- Barthes, R. (1979). 物語の構造分析 (花輪光, 訳). 東京: みすず書房.
- Bruner, J. (1998). 可能世界の心理 (田中一彦, 訳). 東京: みすず書房. (Bruner, J. (1986). *Actual minds, possible worlds*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.)
- Clandinin, D.J., & Connelly, F.M. (2000). *Narrative inquiry: Experience and story in qualitative research*. San Francisco: Jossey-Bass Publishers.
- Daiute, C., & Lightfoot, C. (Eds.). (2004). *Narrative analysis: Studying the development of individuals in society*. Thousand Oaks, Calif.: Sage.
- Denzin, N., & Lincoln, Y. (Eds.). (2003). *Strategies of qualitative inquiry*. Handbook of qualitative research paperback edition vol.2 (2nd.ed.). Thousand Oaks, Calif.: Sage Publications.
- Derrida, J. (2005). 声と現象 (林好雄, 訳). 東京: 筑摩書房. (Derrida, J. (1967). *La voix et le phénomène: Introduction au problème du signe dans la phénoménologie de Husserl*. Paris: Presses Universitaires de France.)
- Derrida, J. (2001). たった一つの, 私のものではない言葉——他者の単一言語使用 (守中高明, 訳). 東京: 岩波書店. (Derrida, J. (1996). *Le monolinguisme de l'autre, ou, la prothèse d'origine*. Paris: Galilée.)
- Gergen, K.J. (2004). 社会構成主義の理論と実践——関係性が現実をつくる (永田素彦・深尾誠, 訳). 京都: ナカニシヤ出版. (Gergen, K.J. (1994). *Realities and relationships: Soundings in social construction*. Cambridge, Mass: Harvard University Press.)
- Glaser, B.G., & Strauss, A.L. (1996). データ対話型理論の発見——調査からいかに理論をうみだすか (後藤隆・大出春江・水野節夫, 訳). 東京: 新曜社. (Glaser, B.G., & Strauss, A.L. (1967). *The discovery of grounded theory: Strategies for qualitative research*. Chicago: Aldine Publishing Company.)
- Goodman, N. (1987). 世界制作の方法 (菅野盾樹・中村雅之, 訳). 東京: みすず書房. (Goodman, N. (1978). *Ways of worldmaking*. Indianapolis, Ind.: Hackett Pub. Co.)
- Guattari, F. (1998). 分裂分析的地図作成法 (宇波彰・吉沢順, 訳). 東京: 紀伊國屋書店. (Guattari, F. (1989). *Cartographies Schizoanalytiques*. Paris: Galilée.)
- Hegel, G.W. (2002). 精神の現象学 上巻・下巻 (金子武蔵, 訳). 東京: 岩波書店. (Hegel, G.W. (1937). *Phänomenologie des Geistes*. Leipzig: F. Meiner.)
- Holstein, J.A., & Gubrium, J.F. (2004). アクティヴ・インタビュー——相互行為としての社会調査 (山田富秋・兼子一・倉石一郎・矢原隆行, 訳). 東京: せりか書房. (Holstein, J.A., & Gubrium, J.F. (1995). *The active interview*. Thousand Oaks, Calif.: Sage Publications.)
- 井上ひさし. (1984). 自家製文章読本. 東京: 新潮社.
- Kant, I. (2004) 純粹理性批判 上・下 (宇都宮芳明, 監訳). 東京: 以文社. (Kant, I. (1781). *Kritik der reinen Vernunft*.)
- 川喜田二郎. (1967). 発想法. 東京: 中央公論社.
- 木田元・野家啓一・村田純一・鷺田清一 (編). (1994). 現象学事典. 東京: 弘文堂.
- Kripke, S.A. (1985). 名指しと必然性——様相の形而上学と心身問題 (八木沢敬・野家啓一, 訳). 東京: 産業図書. (Kripke, S.A. (1980). *Naming and necessity*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.)
- Kuhn, T. (1971). 科学革命の構造 (中山茂, 訳). 東京: みすず書房. (Kuhn, T. (1962). *The structure of scientific revolutions*. Chicago: University of Chicago Press.)
- Lewin, K. (1936). *Principles of topological psychology*. New York: McGraw-Hill.
- McAdams, D.P., Josselson, R., & Lieblich, A. (Eds.). (2001). *Turns in the road: Narrative studies of lives in transition*. Washington, D.C.: American Psychological Association.
- 中谷宇吉郎. (1958). 科学の方法. 東京: 岩波書店.
- Piaget, J. (1937). *La construction du réel chez l'enfant*. Paris: Delachaux & Niestlé.
- 戈木クレイグヒル滋子 (編). (2005). 質的研究方法ゼミナール——グラウンデッドセオリアプローチを学ぶ. 東京: 医学書院.
- Saussure, F. (1972). 一般言語学講義 (小林英夫, 訳). 東京: 岩波書店. (Saussure, F. (1922). *Cours de linguistique générale*. 2e ed.)
- 上野千鶴子 (編). (2001). 構築主義とは何か. 東京: 勁草書房.
- Werner, H., & Kaplan, B. (1974). シンボルの形成——言葉と表現への有機・発達論的アプローチ (柿崎祐一, 監訳). 京都: ミネルヴァ書房. (Werner, H., & Kaplan, B. (1963). *Symbol formation: An organismic-developmental approach to language and the expression of thought*. New York: John Wiley.)
- やまだようこ. (1986). モデル構成をめざす現場心理学の方法論. 愛知淑徳短期大学研究紀要, 25, 31-51. (やまだようこ (編). (1997). 現場心理学の発想

(pp.151-186). 東京：新曜社.)

やまだようこ. (1987). ことばの前のことば——ことばが生まれるすじみち 1. 東京：新曜社.

やまだようこ (編). (2000). 人生を物語る——生成のライフストーリー. 京都：ミネルヴァ書房.

やまだようこ. (2002). 現場心理学における質的データからのモデル構成プロセス——「この世とあの世」イメージ画の図像モデルを基に. 質的心理学研究, 1, 107-128.

やまだようこ. (2003). フィールドワークと質的心理学研究法の基礎演習——現場インタビューと語りから学ぶ「京都における伝統の継承と生成」. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 49, 22-45.

やまだようこ. (2006a). 非構造化インタビューにおける問う技法——質問と語り直しプロセスのマイクロアナリシス. 質的心理学研究, 5, 194-216.

やまだようこ. (2006b). 質的心理学とナラティブ研究の基礎概念——ナラティブ・ターンと物語の自己. 心理学評論, 49, No3.

やまだようこ・西平直. (2003). 訳語について (やまだようこ・西平直, 監訳), エリクソンの人生 (下) ——アイデンティティの探求者 (pp.101-107). 東京：新曜社.

(2006.3.31 受稿, 2006.11.15 受理)